

地獄じごくに行った吉兵衛きちべえさん 滋賀しがけん県

むかし、あるところに、吉兵衛きちべえさんという人がいました。いつもおもしろいことばかりして、気楽きらくにくらしていました。そのうちそれにもあきて、なにかもつとかわったことをしたいなあと思うようになりました。

あるとき、吉兵衛きちべえさんは、ふと、首つりしてみようかと思いつきました。

「いいことに気がついた。これはきつとおもしろいぞ」

吉兵衛きちべえさんはとくいになって、家のうらの柿かきの木に細い縄なわをかけました。そして、台に上がって、

(いよいよ苦しくなったら、縄をちよつとゆるめよう)と考えて、縄で首をくくりました。

台をボンと勢いきほいよくけつたら、体がぶらんと下がって、縄をゆるめるひまもなく、そのまま死んでしまいました。

「しまった。死ぬはずじゃなかったのに」

いくら後悔こうかいしてもどうしようもありません。吉兵衛きちべえさん、思いきりよくあきらめました。とたんに、縄が切れて、ドスンと落ちてしまいました。見ると、足の下に道がずうつとつづいているではありませんか。

「ええい、かまわん。行けるところまで行くぞ」

吉兵衛きちべえさんは、あてもなくどんどん歩いていきました。すると、道がふたつに分かれているところに出ました。

「どっちに行こうかなあ」

そう思つてよく見ると、いっぽうの道はきれいな道で、もういっぽうは草が生えて石がごろごろしていました。吉兵衛きちべえさんは、きれいな道が極楽道ごくらくみちだろうと思つて、そっちを歩いていきました。ずんずん行くと、がんじょうな門がありました。それは、地獄じごくの入り口でした。きれいな道が極楽道だと思つたのはまちがいでした。極楽は、行く者が少ないので、草がおいしげっていたのです。

吉兵衛きちべえさんは、ひき返すのもめんどうなので、なるようになれと、門のとびらをドンドンたたきました。すると、中から、

「だれだ」とどなる声がありました。

「吉兵衛きちべえです」

「吉兵衛はまだ早い。帰れ」

「でも、死んだので来たんです。開けてください」

やっとならびらが開きました。吉兵衛さんが中に入ると、後ろでとびらがぴしやんとしまりました。目の前に強そうな鬼おにがいます。吉兵衛さんは、やっばり来るんじゃないかと思ったら思いましたが、いまさらどうしようもありません。

鬼は、吉兵衛さんをうすぐらい部屋にほうりこんで、

「そのうち閻魔えんまさまのお調べがあるから、それまでここで待っておれ」といって、行ってしまいました。ところが、つぎの日もお調べはありません。そのつぎの日、吉兵衛さんが、（なんとかしてここをぬけだして、もういっぺん生きかえりたい）と考えていると、赤鬼あかおにやら青鬼あおおにやら黒鬼くろおにやらが先に立って、閻魔えんまさまがまわってきました。

吉兵衛さんは、いちばん前を歩いてくる赤鬼のそばへちよちよこと行って、何やら耳打ちしました。すると、赤鬼は、きゆうに、おなかをかかえて、ひっくり返って笑いだし、そこでこんどは青鬼のそばへ行って、また耳打ちしました。すると青鬼もころげまわって笑いしました。そうやって、鬼がみなつぎつぎに笑いだし、とうとう閻魔えんまさままで笑いころげました。地獄じゅうが大笑いしているあいだに、吉兵衛さん、いちもくさんに地獄からにげだしました。

吉兵衛さんの家では、もうお葬式そうしきもすんで、きょうは、おおぜいが集まって法事ほうじをしているところでした。そこへ吉兵衛さんがとびこんできたから、みなびつくりしました。

「吉兵衛、おまえどうしたんだ。どこへ行ってたんだ。どうやって帰ってきたんだ」

みなが口ぐちにたずねると、吉兵衛さん、

「いやなんでもない。地獄へ行ったんだけど、帰りたくなってね。鬼に話をしたら、えらい笑いだしたので、そのあいだに帰ってきたのさ」といいました。

「へえ、鬼にいったい何の話をしたんだ」

みながきくと、吉兵衛さん、笑っていいました。

「来年のことをちよつとといっただけさ」  
おしまい。

原話…『昔話と伝説40（昭和六年四月号）』『高島郡昔話』三三元社

再話…村上郁

